

2021年1月31日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「希望はいったいどこに？」マタイ 15章 29～39節

主任牧師 加藤 誠

**「イエスは…言われた。『群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のまま解散させたくない。途中で疲れ切ってしまうかもしれない』(マタイ福音書 15章 32節)。**

今朝の「七つのパンの奇跡」の話は、福音書の中では目立たない箇所の一つでしょう。「五つのパンと二匹の魚」があまりにも有名なので、同じようなストーリー展開の「七つのパンの奇跡」は読み飛ばされてしまうことが多いように思います。

四つの福音書には主イエスにまつわるいろいろなエピソードが紹介されていますが、「パンの奇跡」の話は四つの福音書すべてに記録されている「唯一」の奇跡物語です。それほど初代教会の人々にとって、このときの主イエスの姿が／言葉が／行動が、印象深く、喜びの出来事として記憶されていたということでしょう。「あのとき、イエスさまはお腹がすいて疲れ切っていた僕らの間で小さなパンを祝福して喜び、神さまに祈りをささげて、そしてみんなに配ってくださった。そうしたら不思議なことに、そこにいた何千人という人たちがみんなお腹いっぱいになって、それだけでなくパン屑がいっぱいあふれたんだ…。あのときのイエスさまだけは忘れられない。どんなに疲れてへとへとになっても、お腹がすいてもう力が出ないという時も、あのときのイエスさまを思い出すと、ほんとうに小さな小さな僕たちのことを覚えて祝福し、喜び、一緒に祈ってくれているイエスさまの姿が見えてきて、もうちょっと頑張ってみようかな…という気持ちになるんだよなあ」と。

だから初代教会の人たちは、どんなに厳しい迫害の中でもみんなで礼拝するために集い、主イエスの言葉に聴くことをやめませんでした。主イエスの言葉、主イエスの存在、主イエスの祈りが、彼らの命の源、喜びの源だったからです。そして初代教会の時代、マタイの教会でも、マルコ、ルカ、ヨハネのどの教会でも、今日のこの場面の「人里離れた寂しい場所」で主イエスがあらわしてくださった喜びの奇跡の物語が語り継いでいかれたのだと思うのです。

それにしてもです。なぜ、同じようなストーリー展開の話をもつ、わざわざマタイとマルコは書き記したのだろう…という疑問がぬぐえませんが(ルカとヨハネは一つだけです)。「どうしてなのか」という疑問を抱きながら改めて「七つのパンの奇跡」の話を読み直してみると、32節の主イエスの言葉に心がとまりました。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のまま解散させたくはない。途中で疲れ切ってしまうかもしれない。」「もう三日も」。主イエスは人里離れた寂しい場所に、この人びとと「もう三日も」いたというのです。いったい何をしていたのでしょうか。すぐ直前を読むと 30節「大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をい

やされた」とあります。主イエスの周りには「横たえられ、癒しを必要とする人・人・人」でいっぱいだったのです。その一人ひとりに手を置いていやされている間、順番を待つ人たちがいたでしょうし、癒された後も帰らずに他の人たちがいやされるのを待っている人たちがいたのでしょうか。そうやって三日三晩、人びとも空腹を我慢しながらそこにいたのでしょうか、主イエス御自身も食べ物を口にする暇なく、彼らと共におられた。何だか、今のコロナのために逼迫し、医療を必要とする人びとであふれている病院の光景が重なってくるわけですが、主イエス御自身、疲れ切っていたらうに、しかし自分のことよりもここに集まってきた人たちのことを主イエスは心配しておられるのです。

目の前に見えている事実だけを見るなら、貧しさの中、今日食べるものにも事欠き、癒しを必要とし、待ち続けている人たちの人数のおびただしさに心が萎えそうになります。「きりが無い。何ができるのだろう…」。つい、そうつぶやきたくなります。けれども、その一人ひとりに注がれる主イエスの慈しみが尽きることはないのです。そして主イエスは何より一番大切なものを私たちの間で分かち合ってくださいます。それは主なる神を礼拝すること。どんなに人里離れた場所でも、病いに囲まれた辛い現実の中にも、注がれている神さまの慈しみと可能性（小さなパンとわずかな魚）を感謝して喜び、一緒に神さまを見上げて礼拝していくこと。そこにこそ私たちの命の源があり、希望の源があることを、主イエスは教えてくださったのでした。

先日、平塚教会の平野牧師が教えてくれてNHKの「おはよう日本」を見ました。17年前にカメルーンから来日したメイさんという女性のレポートでした。母国に帰ると迫害の危機があるため日本政府に難民申請をしましたが放置され続け、そうこうしているうちに住所変更を届け出なかったために入管に收容されてしまいます。メイさんは腹部の痛みを覚えて診察を希望しますが、なかなか診てもらえない。検査してもらえたのは訴え出て一年半後。そのときには卵巣がんが全身にひろがっていたそうです。にもかかわらず何の治療も受けられず、コロナ対策ということで收容人数を減らすためにメイさんは「仮放免」で入管から追い出されます。体調もすぐれず空腹で道ばたでうずくまっているところを通りかかった阿部先生という牧師が、受け入れてくれる病院を一緒に探してくれて、聖ヨハネ会というキリスト教の病院に入院することができたのでした。治療的には手遅れの状態でしたが、メイさんは病院のベッドの上で人としての尊厳を取り戻し、治療を受けながら亡くなっていかれたということです。

今、コロナで特に社会的な立場の弱い人々にしわ寄せが行き、多くの方が命の危機にあることが報告されています。そういう現実の中で、主イエスが一人ひとりに注いでくださっているまなざし、祈りを覚えていきたいのです。そして、その困難な希望が見えないように思える場所で何よりも私たちを神さまの恵みを真ん中にする礼拝に導いておられる主イエスの存在を覚えていきたいのです。